

## 「親の接し方と虐待」



鹿児島県児童総合相談センター相談部長

田 中 一 朗

### ■略 歴

昭和19年10月	生まれ	鹿児島県始良郡吉松町出身
昭和38年	3月	鹿児島市立玉龍高校卒業
昭和42年	3月	立命館大学文学部心理学専攻卒業
	9月	鹿児島県立鹿児島保健院 (現県立始良病院)
昭和59年	4月	鹿児島県中央児童相談所
昭和60年	4月	鹿児島県児童総合相談センター
平成4年	4月	鹿児島県大島児童相談所
平成7年	4月	鹿児島県児童総合相談センター、 現在に至る。

本来、子どもというものは、周囲から期待され、待ち望まれてこの世に「生」をうけるものと思っている。当然、親の方も親である以上、子どもに対して、誰もが五体満足で生まれてくることを願い、健やかに育つことを期待するはずである。

ところが、世の中の神様は、必ずしもその願いや期待を率直にはかなえてくれないのである。いや、「神様は」というより、「親の都合によって」と言えるかもしれない。

一度だって母親の胸にだかれたことのない子どもたち、自分の親の顔や名前すら知らない子どもたち、二本足で走り回れる喜びを経験できない子どもたち、非行に走ることで自分の存在を誇示したり、親への反抗を繰り返す子どもたち等を何人も見てきている。

これらの子どもたちをどう救い、どうかかわっていけばいいのかを求めて、当センターには日々、これらの相談が舞い込んでくるのである。迷子や家出少年の保護も業務のひとつである。

そして、今また、全国的にも社会の関心を集め、深刻な問題となってきたのが「虐待問題」である。虐待は、子どもたちを虐待することでしか自らの感情をコントロールできない親の問題でもある。もちろん、親には「虐待している」という認識はない。

これらのいずれのケースも、形こそ違え、共通していることは、子ども自身から救いや助けを求めてくることは、まずないということである。

求めているものの、周囲がそれに気づかないということも、中にはあるかもしれないが、それらの多くは、親、あるいは大人の側の意図によって持ち込まれることが多い。

しかも、「子ども」の方だけが一方的に変わることを求めてである。むしろ、変わらなければならないのは「親」の方である。

その意味で、子どもの問題は、行き着くところ、親のかかわり方の問題であり、家族全体の問題でもあるという実感を強くしている。

子どもが、日々発する、いろいろなサインやメッセージに親や大人が気づくことの大切さを再認識し、気づいた時、どうかかわっていったらいいのかを、いろいろな事例を通して考えてみたい。

その意味で、「児童総合相談センター」という看板を掲げている当センターは、さしずめ、「親相談センター」とでも言うべきかもしれない。